

ファンの複雑な気持ち

わたしはバスケットボールが好きだ。大好きだ。子どもの頃からバスケットをやっている、今でもときどきやるし、試合をテレビやネットで見るのも大好きだ。コロナ・ウィルスのパンデミックが起こる前は、よく試合会場にも行って、好きなチームを応援していた。学生たちの試合から、プロ・チームの試合まで、バスケの試合であれば何でも好きだ。毎月発売されるバスケ雑誌は30年以上欠かさず読んでいます。日本国内の試合だけではなく、海外の試合もできるだけ見ている。バスケは、男子の試合も好きだけど、女子の試合の方が何倍もおもしろいと思う。体の大きさや背の高さ、力の強さではなく、頭を使ってチームで協力して試合に勝つ。そんな魅力が、女子バスケにはある。わたしの「推し（好きなものや人、応援している人）」は女子バスケ、特に日本の女子バスケだ。

でも、女子バスケはなかなかメディアに注目されなかった。日本代表チームの試合も、テレビで見られるのは、ほとんど男子の試合だけだ。NHKのバスケ番組も、内容の9割は男子の話題だ。女子バスケは、国内のトップ・リーグの試合でさえ、地方都市の小さな体育館で行われることがある。地元の中学生たちが選手用の椅子を並べたり、コートにモップをかけたりする中で行われる試合は、もちろん、テレビで放送されることはない。新聞や雑誌の関係者もほとんどいない。私自身は、小さな会場で選手たちを近いところから応援するのが好きだが、メディアが男子ばかり注目する状況を残念にも感じていた。

しかし、2021年の東京オリンピックをきっかけに、日本の女子バスケットを取り巻く環境は大きく変わった。決勝戦でアメリカに敗れたが、見事銀メダルを獲得したからだ。日本代表選手12人の平均身長は176cm。出場した12チームの中で、2番目に低かった。銅メダルのフランスは185cm、金メダルのアメリカは184cmだった。162cmの町田選手が190cm以上の、時には200cm以上の選手たちをドリブルで抜き去るのは爽快だった。この小さなチームの活躍は日本中の注目を集め、大会中も大会後も、メディアは女子バスケットを大きく取り上げた。連日、選手たちの顔をテレビや新聞で見えるようになった。ヘッド・コーチも注目され、彼に関する記事も毎日のように見かけた。銀メダルを「奇跡」と表現するメディアも多かった。



(Drawn by Hinako FUJIMURA)

ここで、^{ながねん}長年の^{ねつきょうてき}熱狂的^{じょし}な女子バスケ・ファンとして、^{こえ}声を^{だい}大にして^い言いたい。

^{なんねん}何年も^{まえ}前からずーっと、^{だんし}男子より^{じょし}女子の方が^{ほう}強^{つよ}かったじゃん！

……^{こうふん}興奮してしまった。「^{つよ}強^いかったじゃん！」と^い言^{てい}ってしま^いった。^{ていねい}丁寧^いに言^いいま
す、^{つよ}強^いかった^すですよ^ね？

そう、^{にほん}日本の^{じょし}女子バスケは、^{とうきょう}東京^{まへ}オリンピックの^せ前から^{かいてき}世界的に^{みと}認められて
いたのだ。^{だんし}男子の^{にほんだいひょう}日本代表^{とうきょう}チームは^{ねんかん}東京まで^{しゅつじょう}45年間^{しゅつじょう}オリンピックに出^{しゅつじょう}場^{しゅつじょう}で
きな^{しゅつじょう}なかった。^{とうきょう}東京に出^{しゅつじょう}場^{おこな}できたのも、「^{くに}オリンピックが^{おこな}行^{くに}われる^{くに}国の^{くに}チーム
は、^で出^いることができる」という^{とくべつ}特別な^{いっぽう}ルールがあ^いった^いからだ。一方、^{じょし}女子は^い1996
^{ねん}年、^{ねん}2004年、^{ねん}2016年と^{じぶん}自分^{じつりよく}たちの^{しゅつじょう}実^{しゅつじょう}力^{しゅつじょう}で^{しゅつじょう}オリンピックに出^{しゅつじょう}場^{しゅつじょう}して^{しゅつじょう}いた。^{しゅつじょう}1996
^{ねん}年と^{ねん}2016年は、^{さいしゅうてき}最終^{ゆうしょう}的に^{やぶ}優^{ちい}勝^{せかい}した^{せかい}アメリカに^{せかい}敗^{せかい}れた^{せかい}が、^{せかい}小^{せかい}さ^{せかい}く^{せかい}ても、^{せかい}世界^{せかい}の
^{おお}大^かきな^{しょうめい}チ^{とうきょう}ームに^{とうきょう}勝^{とうきょう}て^{とうきょう}るとい^{とうきょう}う^{とうきょう}こ^{とうきょう}とを^{とうきょう}証^{とうきょう}明^{とうきょう}した。^{とうきょう}東京^{とうきょう}オリンピックが^{とうきょう}は^{とうきょう}じ^{とうきょう}まる
^{まへ}前の^{せかい}世界^{だんし}ラン^いクも、^{だんし}男子^いは^{じょし}42^い位^いで^い女子^いは^い10^い位^いだ^いった。^い10^い位^いとい^いって^いも、^{にほん}日本^{にほん}は、
^{じぶん}自分^{じょうい}たち^{くにぐに}より^{きんねんなんど}上^か位^かに^かいる^かい^かく^かつ^かか^かの^か国^か々^かに、^か近^か年^か何^か度^かも^か勝^かつ^かて^かいた。

だから、わたしたち^{じょし}女子^{とうきょう}バスケ・ファンは、^{とうきょう}東京^{かつやく}オリンピックでの^{かつやく}活^{かつやく}躍^{かつやく}を、
^{じゅうぶん}十^{こんきよ}分^もな^{きたい}根^{きたい}拠^{きたい}を持^{きたい}って、^{きたい}期^{きたい}待^{きたい}して^{きたい}いた^{きたい}のだ。

さて、嬉しいことにオリンピック後は、多くのメディアで女子バスケが取り上げられるようになった。しかし古くからのファンとしては、少し複雑な気持ちだ。それまで全く有名ではなかった、私の「推し」の町田選手が、超のつくほどの有名人になってしまったからだ。今まで、国内のトップ・リーグの試合は観客が少なくてがらがらだったけど、たぶん、これからしばらくは、チケットを取るのが大変になるだろう。地方の小さな体育館で町田選手に気軽に握手をしてもらうということも、もうできなくなってしまうかもしれない。

注目されないと悔しい、でも注目されすぎるのも困る。「推し」を応援するファンの気持ちは、自分勝手に複雑なものだ。

(1699字)

(2021.8 Written by Junko SATO)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<https://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.